
よくある霊能カタルシス

藤田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よくある霊能力タルシス

【Nコード】

N4927I

【作者名】

藤田

【あらすじ】

それなりの人生を歩む少女、村瀬美佳。

平凡な生き方を望む彼女であったが、一人の男との出会いから“非凡”へと誘われていく…。

よくある晴れた日、滅多にない出来事

別に、変化なんて望んでいなかった。

そこそこの容姿、中の上くらいの成績、至ってフツウの彼氏。

このまま高校卒業して、キャンパスライフを楽しんで、社会人になって、同窓会なんかで「昔と全然変わってないね。」とか言われて……それなりの人生。それでよかった。

トラブルもなく、平凡な、だけどそれでいて……、幸せ。

今思えば、達観はしてたんだと……思う。

その程度でいい、その程度の人間だから……。

今、目の前で起きている事象は、私の人生に置ける……^{コト}大惨事。

私の器を砕け散らせたその人は、口に啜えた“しんせい”にマッチで火をつけ一服つくると、眼鏡越しにこちらに目をやり、低めの、落ち着いた声で呟いた。

「……………パンツ、見えてるぞ」

「み〜かつ！おっはよ〜！」

いつも通う通学路、学校へと続く坂道の三合目。いつもと変わらない元気な声に背中を押される。

「おはよ、真琴」

振り向き、挨拶を返すのは和泉真琴…私の親友の一人。

ソフト部所属の体育会系で、いつもその自慢のポニーテールを、本当の“馬の尻尾”のようにピヨピヨ跳ねさせている。

よく言えばおっちょこちょい。悪く言えばそそっかしい。

まあ、それが欠点にならない女の子と言えば全て伝わるだろうか？
つまり…そういう子なのである。

「遅刻しそうだったから、走ってきちゃったよ〜！美佳も急がなくていいの？」

私の肩に手をおいたまま、隣で荒くなった息を整える真琴は、登場して間も無く、よくわからない事を言い出す（オチはだいたいわかるのだが…）。

「真琴……時計、止まってない？」

「……………え？」

私の一言に真琴の表情がビシリと固まった。
そして、左手の腕時計をゆっくりと確認すると……

「ザ・ワールドッッッ！！」

虚空に向かって意味不明な雄叫びをあげた。

「……………行こうか」

「……………うん」

それからは他愛もない話。昨日のテレビの事とか、どこどこのスイーツがおいしいのとかを話しながら学校へと向かう。下駄箱を通り、一階にある教室に着くと、既に席についているもう一人の親友、溝口奈々子に話し掛ける。

「おはよう、奈々子」「ナナ、おっはよー!!」

「おはよう二人共。あら？珍しいわね。真琴がこんな時間に登校するなんて……」

奈々子はふんわりとした優しい笑顔で挨拶を返すと、普段はこの時間にいるはずのない人間に対して首をかしげる。

「いや、たまには早起きを試してみようと思ってます……」

「こっぴどい事よ」

私はおどけて誤魔化す真琴の手首を掴むと、針が微動だにしない時計を見せた。

「ふふ、そういう事ね」

「あちゃ〜、バレたか」

溝口奈々子：おとなしめの文学系女の子で、私のもう一人の親友。物腰の柔らかい、THE・女の子といった感じであり、その瞳の大きい童顔とあいまって、男子からの人気がやけに高い。成績もよく実際に級長も務めており、優等生といった言葉がとてもよく似合う子である。

私達三人は席も近く、普段、学校にいる時間のほとんどを一緒にいる。部活などを除いて、そうじゃない時を挙げるのであれば、私が“男”の事情で離れる時くらいである。

「そろそろHRが始まるわね」

奈々子が壁の時計を見てそう零すと、教室内がバタバタと騒ぎだし、直後に始業を告げるチャイムが校内に鳴り響いた。

そこからはつまらない授業の連続。真面目にノートをとったり、手紙を回したり。フツの女子高生らしい行動。

そうしているうちに昼休みになり、狭苦しい教室から移動した私達は、なんともなしに中庭に出ていた。

「う〜、やっぱりシャバの空気は美味いぜー！」

「囚人がよ…」

相変わらずの真琴のポケにツッコむと、私達は食事をするのに適当

な場所をぶらぶらと歩きながら探す。
周りには同じような目的で歩いている人達、既に座って食事を開始している人達がちらほらと見えた。

「あ、あそこ…」

5分かからない位だろうか、奈々子がちょうど木陰下に空いているベンチを見つけ、私達はそこで食事をすます事に決定した。

「いただきまーす！」

相変わらずの元気で両手を勢いよく合わせると、ガツガツと一気に白米をかき込む真琴。男顔負けの食べっぷりである。

「美佳、それちよーだい！」

米を口に含んだまま、素早い箸さばきと狩人の目で真琴は私の弁当箱から玉子焼きを許可もなくかすめ取っていく。

「ちよつと、それ私の………」

「古来から言うではないか、お前のものは俺のもの、俺のものも俺のものって…」

「ジャ、ジャイアン…。いや、女だからジャイ子だ」

「だれがジャイ子だ！」

絶対強者の理論を振りかざした真琴にそう言つと、途端に米粒を口から飛ばし怒る。

どうやらジャイ子はNGらしい。

「ふ、二人共喧嘩はやめて。美佳、私のをあげるから、ね？」

「いや、そういう訳じゃないんだけど…」

いつものように困った顔の奈々子がずれた発言でその場をしめると、仲良く食事を再開。いつも通り、いつもと変わらぬ昼食だった。食後、ベンチにて風にそよがれ、心地よい満足感にまどろんでいると、思い出したかのように急に真琴が話し掛けてきた。

「ねえねえ美佳。あの噂、知ってる？」

「ハイハイ、どうせまた下らない噂でしょ？」

「ひどっ!?!?」

もはや毎週恒例となった真琴の噂話。誰々の好きな人から都市伝説まで、話題は尽きる事を知らない。

一般の女子高生ならスグ食い付くのであるいつもの、私はあまりそうだったものに興味はない。……が、とりあえずは聞いておく。それくらいの好奇心はあるのだ。

「……………で、何？」

「お、食いついた。いやあね、風の噂で聞いたんだけど……………なるかみ成神公園裏の通り……………出るらしいよ?。」

「いやあああああ!?!?!?」

突然の奈々子の大声にビツクリする私と真琴。心臓がビクリと大きく動いた後、バクバクと高鳴り続けているのがわかる。そして、その大声を出した本人はと言うと、耳をふさいで小動物の如く震えていた。

「大丈夫よ奈々子。お化けなんている訳ないじゃない。ただの噂よ」

「ほんとぉ…?」

………カワイイ。

その小さな体を震わせながら目をウルウルさせた美少女が、頼りなげにこちらを見上げている。女の私から見てもコレはヤバいぞ。

「そつよ、奈々子。お化けなんていなる訳ないじゃない。だから…」

……

真琴はおびえる奈々子の肩に優しく手を乗せると、母が子に言い聞かせるような声でそつ話した。

だが、次の瞬間……

「放課後、確認しに行こうぜい！」

親指を力強く立てた（しかも、なぜかペコちゃん顔で）。

「い~~~~~や~~~~~!!!!~!!~!!」

白（前書き）

タイトルの読みは《しろ》ではありません。
読めばわかると思います。

白

キーンコーンカーンコーン

終業を告げるベルが鳴る。学生の“仕事”がやっと終わる時間だ。ガタガタとせわしない中、私が教科書を片付けていると、真琴が意地の悪そうな笑顔を浮かべて近付いてきた。

「な、な、こ、ちゃん！楽しい楽しい放課後のお時間ですよ」

同じく教科書を片付けている奈々子はビクツと体を動かすと、青ざめた顔で声の主へと振り向く。

「本当に行くの……？」

「もちツ！」

恐る恐る尋ねる奈々子に、自信満々な笑顔で答える真琴。全く……この無駄な行動力を別の所に活かしてほしいものだ。

「アンタ、ソフト部は？」

「今日は休みなのだ〜！」

そう嬉しそうに語る真琴の様子を見て私は悟る。ソフト部がなくて暇だから、奈々子をおもちゃにして今日を過ごすつもりだな、と。

「さあさあ、お二方行きましょ〜か！」

「その前に私、寄る所があるんだけど…」

「彼氏のトコ？」

「いや、バイトのシフト出しに…。期日が今日までだからね」

ここまで言った所で、真琴が顎に手を当てて考え込む動作をする。そして、その顔をしばらく眺めていると…

「じゃあ、あたし達もついてくよ。美佳のバイト先なら成神公園から遠くないし、それに、一人だけ逃げられても困るしね」

「えっ！？美佳、そうなの？」

「んな訳ないでしょ」

こんな小動物状態の奈々子を置いて一人で逃げられる訳がない。そんな事したら間違はなく私は悪者だ。それを知ってか、隣では真琴がニヤニヤと笑っている。

「では行きますか！」

私達が住むここかみより神寄町は、現在発展途上にあるため都会と田舎が混ざりあったような奇妙な町並みをしている。私達の学校付近は起伏の多い田舎であるが、そこから少し歩くだけでビルの並んだオフィス街といった、目茶苦茶な状態なのである。

そこから中で工事が行われ、古い物を駆逐して、侵略するかのようになり急ピッチで町が変わっていく様は少し気味が悪いが、今を生きる女

子高生の私はその尻馬に乗って小遣いを稼いでいるのである。

学校から徒歩十数分、別の街のようになった“そこ”にある大手チェーンのファミレスが私のバイト先。二人は外の駐車場で待ってもらい、私はさっさとシフトを提出しに行く。

ここにいる男共に二人の姿を晒してしまうと、それこそ収集がつかなくなつてシフトの提出どころではなくなるからだ。

だが、暇を持って余す店長の小言に付き合わされたため、思った以上に時間がかかってしまい、店を出る時には30分以上経ってしまった。

「やば！二人共怒ってるだろうな」

あのオッサン（店長）を恨みつつも大急ぎで駐車場へと私は行くと、二人は奇妙な男と会話をしていた。

身長180cmはありそうだが、細身のスーツを着たその眼鏡の男は、二人と少し言葉を交わすとそのまま離れていった。

「道でも聞かれたの？」

「うわ！美佳！？」

なぜか深刻そうな顔をしている真琴に後ろから話しかけると、滅茶苦茶驚かれた。

・・・私は化け物か。

「で、なんだつたの？」

「そ、そう！道を聞かれたの！それだけ！」

あやしい……。これだけ動揺しておいて、道を聞かれただけなん

であるのだろうか。

目を逸して無理に笑う姿は、普段以上に奇妙な感じだ。奈々子にいたっては顔が青いだけでなく、真琴の隣でカタカタと小刻みに震えている。

「まさか、あの男に変な事でもされたの!？」

私は嘘をついているであろう真琴の肩を掴むと、真実を問い直す。私の真剣さに真琴も気付いたのか、ゆっくりとその重い口を開いた。

「いや、そうじゃない。さっきの人に言われたんだ、あそこには行くなって。特に奈々子だけは絶対に連れて行くなって」

「そいつ、一体何者なのよ。私達がこれから成神公園に行くことを知ってるなんて……。でも、よかつたじゃない、行く前に聞けてやっぱ行かないほうがいいのよ、あんな不気味なところ」

気味の悪さを感じて男の行った方向を見ながら私がそう言うと、真琴はうつむいて歯切れの悪い声で呟いた。

「ごめん、美佳。私達、待ってる間に……。行っちゃったんだ」

「え!？」

「少しだけ、様子見のつもりだったの……。行って何もなければ私達が美佳を驚かせてやるうって」

「で、でも。お化けなんてデマなんでしょ?」

私がこう言った瞬間、今まで小刻みに震えていた奈々子の体がビク

りと動き、ある一点を指差して声にならない声をあげ始めた。

「あっ……あ……」

「!?!い……や……」

それと同時に、同じ方向を見た真琴の顔までもが青ざめ、恐怖に歪みはじめる。

何があるのかと真琴の肩から手を離すと、私もその方向を見る。

そこに、それはいた。

人の姿をしているが、明らかに人ではないそれ。

眼球がだらりと垂れ、肋骨がボロボロのシャツと胸板を突き破り、足が変な方向へと曲がったそれは、ゆっくりとこちらへ近づいていた。

体が硬直する。恐怖で声が出ない。

叫びたい、でも出るのは荒い呼吸音だけ。

三人がその場で涙を浮かべ、ただただ無力に立ち尽くす中、それは確実にこちらとの距離を縮めている。

ズズッ……

ズズッ……

周りはこちらに気づいていないのであろうか？ 普段、人と車で騒ぐ道に足をひきずる乾いた音だけが木霊する。

まるで、私達だけが違う空間に押し込められた感覚。

誰か、誰でもいい。

・・・助けて。
私がそう願った時である。

「走れっつっ!!!」

聞き覚えのない声がある場に響いた。すると、音が、感覚が体に戻った。弾かれたようにそいつとは反対方向に走りだす私達。声のした方向を見ると、先程の眼鏡の男が腹だたしそうに立っていた。

「チツ、やっぱり行ってたのか」

その男は私達を追いかけてくるそれをチラリと見やると、舌打ちと共にそう零した。

「こっちだ。」

私達の進行上に立った男は、クルリと向きを変え、先導をする。私達と違い、余力をもったまま走る男にすぐ追い付くと、同じ速さで走りながら私は話しかけた。

「あ、あなたはさっきの・・・」どうして嘘をついた」

私の言葉をさえぎり、その男は必死で走る二人に話しかける。その口調には多少怒りが混じっているようにも聞こえる。

「だ、だって・・・」

「行ったなら行ったと言えばこちらとしてもやりようがあったんだ。」

言葉を濁らせる真琴とは違い、ハッキリとした口調で話しつつける男。

その目は前を向いており、そっぽを向いているようにもとれる。

「お前達の責任だ。あそこへ行ったことではなく、行っていないと俺に話したことだ。」

さらに口調を強め、まるで責めるように話し続ける男の言葉に、真琴は涙をこらえる。

言っている意味はわからないが、その質問に対して有無を言わせない威圧感が男にはあった。

「ちよ、ちよつとあんた。」

いまにも泣きそうな真琴を守るため、私はなんとか二人の話に割り込む。

すると、そいつは眼鏡越しにこちらをジロリと見下ろしてきた。

やばい、コイツ案外怖い。

「あんたじゃない。白だ。」

白（後書き）

白つくもさんの名前の由来は白寿から来ています。

百つくもひくーで白、そんでもって〓九十九つくもときています。

無理矢理です。でも気に入っています。あと、苗字です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4927i/>

よくある霊能カタルシス

2010年10月8日22時17分発行